
君へ

世一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ

【Nコード】

N1710C

【作者名】

世一

【あらすじ】

聖菜がいなくなつて3週間後、初めて聖菜の死を知らされた明彦。聖菜のことを忘れるため、引越しを決意し、準備に取り掛かったとき、聖菜が明彦宛に書いた手紙を発見、そして、それを呼んだ明彦は…

ブログ

俺は荷物をまとめた…

全てはあいつを忘れるために…

あこのころの俺らはまだ14歳で
それでも本当の恋をした。

年なんて問題でもなんでもないんだ。

俺たちは幸せだった…

でも

若すぎたんだ…

互いにいる時間と、互いが離れている時間のギャップに苦しんだ末、
高3の春俺らは分かれることにした。

嫌いになったからとか、冷めたからという問題じゃなく、
純粹に「無理だ」と感じたんだ。

でも、心はその恋からは離れられなかった…。

12年の月日がたち、
俺はあいつに再び恋をした…。

第一話 死

「こないだは、残念だったな。」

ほのかに寒くなり始めた秋、喫茶店の茶を飲みながら、何を話すわけでもなくただなんとなくそこにいた和也かずやが沈黙の間を埋めるかのように静かに言った。

「え？」

「聖菜せいなのことだよ。」

聖菜とは、俺が高3の春に別れたいわゆるモトカノのことだ。なんで、彼女の名前が出てきたのだろう…しかも残念??

「なんで聖菜の話が出てくるの？」

「は？」

俺が放った言葉は、見事に和也の勘に触つたらしい。

いきなり席を立った和也は、俺の胸ぐらをつかんで、無理やり俺を立たせた。

「テーマ元カノがあんなめにあつたのになんだよその言い草!!」

お前人間以下だよ!!」

「はあ?なんで怒ってんだよ!?

聖菜に何があつたんだよ!?!意味わかんねえ!!」

いきなり変なこと言われて頭にこないはずも無く、俺は当然のように声を張り上げた。

俺らの張り上げた声で、店内がシンとなっているのに気がつくと、

俺らは逃げるように会計を終わらせ、場所を変えた。

俺たちは俺んちの近くの公園に場所を移した。今日は休日だから、子供連れの大人とかが多いと思ったけど、そんなことはなく、いたって静かで平日の朝とほとんどと言って良いほど変わりがなかった。俺らはベンチに座りしばらく黙っていた。

「何だよ・・・さっきの。」

話始めたのは俺だった。

沈黙の居心地が悪かったという理由も一理あるが、それ以上に元カノ、聖菜の身に何が起こったのかが心配だった。

「なにがだよ」

知ってるくせに…そう和也をじれったく思いながらも俺はなるべく言葉ひとつひとつを丁寧を選んで言った。

「聖菜のことだよ。おれ、聖菜と別れて12年一回もあいつの話題聞いたことがねえし…いきなり残念だったとか言われても意味がよく理解できねえ…」

そのとき、公園に来て初めて和也が俺の方を向いた。

「本当に一回もか？」

大きく見開いた二つの目がこっちを見ていた。

どうやら、俺は聖菜のことで一回はきいとかないといけない情報があるようだ。

「ああ…一度も聞いてない。」

和也、頼む。教えてくれ、聖菜がどうしたんだ？」

和也が小さく「まじかよ」とつぶやく声が聞こえた。

そのあと、深呼吸をすると、急に俺の両肩を痛いくらいにつかんできた。

「よく聞けよ。んでもって、冷静に聞け。」

分かったか??」

なんだかよく分からなかったから、俺は曖昧に返事をしといた。

「ああ。」

すると、和也は目を瞑り、またさっきよりも深く深呼吸をした。

「聖菜…ちようど3週間前、車にはねられて死んだんだ。」

「え？」

死んだ…

死んだんだ…

死んだ…？

少ししてから、ようやく言葉の意味を理解した。

でもなんとなく、和也が嘘をついてるようなきがして聞き返した。

「何だそれ？今なんて？？」

和也はその場にしゃがみこんだ。

和也の声はもう、俺が30年間聞いていた聞きなれた声じゃなかった。

くしゃくしゃのしわしわになった声で和也は精一杯俺に話を聞かせてくれた。

「だから…3週間前に…はねられたんだよあいつ。」

ひき逃げされてよお…ひいた奴まだ捕まってねえんだよ…

悔しいよなあ？？おい…

葬式ん時な、俺、あいつの顔みたんだ。

真っ白通り越してもう真っ青でさあ…よくできた、蠟人形みたいだったんだ。

だけど、その蠟人形のために、何人もの人が泣いてんだよ。大の人が声だしてよお…泣いてんだよ。

恥ずかしいくらいないた後で、みんな聖菜の母さんに言うてくんだ…『ご愁傷様でした』って…。

あいつは、もう死んだんだ。生きてないんだよ。帰ってこねえんだよ。

あいつの笑顔も、泣き顔ももう声すら聞こえねえんだよ。」

すぐぐしゃぐしゃの声で、ところどころアイダあけて…それでもまだ懸命に話そうとする和也が見てられなくなって、俺は無理やり笑顔を作って和也に言った。

「もう、いいよ」

これ以上長い言葉喋ると俺の声も和也みたいにぐしゃぐしゃになりそうで、俺はそれ以上言わなかった。

聖菜は死んだ。

俺はそれを3週間後知った。

あいつの前に、線香一本立てられず、あいつがこの世から消えて3

週間ずっと何も知らずに笑って生きてきた。

もう、会うことも無いと思ってた相手でも、いなくなると悲しいんだ…と思った。

その日は、涙が止まらなかった。

死んだあいつとの思い出がたくさん詰まった俺の部屋で、俺は一晚中泣いた。

次の日、俺は聖菜の母親の家に、線香を上げさせてもらいに行った。久しぶりの聖菜の家、喪服^{もふく}に身を包んだ姿で、インターホンを押した。

ピンポン…

久しぶりの音の後に、聞き覚えのある声がした。

「はい、桜井です。」

「あ、大野と言います。大野明彦^{おおのあきひこ}。以前、聖菜さんとお付き合いさせていたもので…」

「あきひこ？」

悲しみを含んだ声が、一変して怒りと憎悪の声に変わった。

「はい、大野明彦です。」

「…下さい」

最初の部分が聞こえず、俺は聞き返した。すると、信じられない言葉が耳に聞こえてきた。

「お引取り下さい」

意味が分からなかった。

なぜ、引き取らないといけないのか、なぜ、そんなことを言われなといけないのか、全然理解ができなかった。

「あの…」

理由を聞こうとした瞬間ブツツと切れる音とともに、家の中の音がインターホンから聞こえなくなった。

しばらく俺はその場にボーッとたっていた。
しかし、われに返るともう一度インターホンを押してみた。でも、
もう二度と聖菜のお袋はインターホンを通して俺に声を聞かせてく
れなかった。

数分後、俺は仕方なくその場を去っていった。

喪服のまま、何をするわけでもなく、ただ、ただボーッと町を歩い
ていた。

「あのお……」

聞き覚えのある声だった。しかし、振り向く気にはなれずずっと俺
は歩いていった。すると、ここにいるはずのない顔が俺の前に立ち
はだかった。

俺は無意識に

「聖菜」

と言っていた。聖菜なはずがないのに……

「そっくりになりましたよね、私。」

「ああ、^{かなめ}要ちゃんか……ごめん……」

要ちゃん、聖菜の唯一の妹で、唯一の姉妹だった。

要ちゃんは、下を向いている俺をみて、笑顔で言った。

「良いんですよ！！そんなこと！！」

「……ごめん」

「何がですか？」

「俺は、今まで何も知らなかったんだ。」

違う……今も何も分かってないんだ。」

涙が出てきそうに、俺は目を大きく見開いて空を見た。

「あいつの彼氏だったのに、何一つあいつの周りのことを俺は分か
つちやいない……」

そんな俺をみて、要ちゃんは気持ちよく笑った。

「変わってないですねえ！！」

すごくマイナス思考！！本当に30代の未婚の人間ですか！？

人間負け犬になると逆に立ち直るって聞いたのに」

そっくりだった。何もかも、聖菜の笑顔に、声に、考え方。全てが聖菜のようだった。

「明彦さん、ところで、何を知らないんです??」

「へ?」

「だから、お姉ちゃんについて、さっき言ってたじゃないですか。何一つ周りのこと分かってなかったって。」

「ああ...」

俺は、全部を話した。軽蔑されることを覚悟で。

今は要ちゃんとは、仲良く話している気分になれなかった。

いつそう、嫌われたほうが良いと思ったくらいだった。

けど、そうはいかなかった。全部聞き終わったあと、要ちゃんは少し悲しみを含んだ笑顔で、話し始めた。

「お姉ちゃん、明彦さんと別れた後すごく落ち込んで、それでお母さんは、きつと明彦さん嫌いになっちゃったんですよ。

でも明彦さん！自信を持ってください！！明彦さんはお姉ちゃんが好きになった、最初で最後の人間なんですから！！」

「最後...??」

「そおですよ！！お姉ちゃん、何を決意したのか、私に『私は明彦を最後の彼氏にするから！！』って、私の前で、宣言したんですよ！！」

要ちゃんは手を上げて聖菜のまねをして俺の前で宣言してくれた。

「あッ」

要ちゃんが思い出したように叫んだ。

「どうしたの?」

「明彦さん！！やっと笑ってくれましたね！！」

そう言えば、要ちゃんを見ていたら、口元が自然とゆるくなっていた。

「明彦さんは、とてもとても素敵な男性です。ちゃんと自信を持っ

てください!!」

そういつて、おもいつきり背中を叩いてくれた。

最初で…最後の彼氏…かぁ。

第二話 夏

くそ暑くて、蝉がうるさいくらいにいてる中二の夏真っ只中。

俺と聖菜は図書館で勉強をしていた。

聖菜と俺は、そんなに親しい仲では無かったのだが、夏休みに入って、よく図書館で会うのをきっかけに良く話すようになった。

「意外だね、本…好きなの??」

それが聖菜が始めて俺に話しかけた時に言った言葉だった。

「いや…別に。お袋が、勉強しに行けってうるさいから。」

「そうなんだあゝ。じゃあ一緒に勉強しない?」

「え?」

「大野君いつも数学のテストで一位でしょ??数学教えて!!」

そのかわり、私にできることなら何でもするから!!」

そんな、こんなで、俺たち二人は夏休み中ずっと一緒に勉強していた。

聖菜はいつもテストの総合点は学年トップで、そんな彼女に俺が唯一勝てる教科が数学だった。

聖菜はいつも明るくて、スポーツもできる。クラスのみんなからは憧れの的だった。

そんな彼女に、俺は数学を教えている…。

数学万歳!!!

「今日ってさあ、夏祭りだね」

いつものように向かい合って勉強していると、聖菜がつばやいた。

「ああ…そういえば…」

夏祭り…なんて久々の響きなんだろう…

まい年この夏は部活か勉強で、俺はこの夏祭りなんて5年ぐらいツたことがない。というか、行こうと思ったことが無い…が適切か

な??

「誰かに誘われてる??」

そんなわけない、5年間ずっと断りっぱなしでもうみんな声をかけてすくれない。

「いんや、誰にも誘われてねえ。」

「じゃあさあ・・・」

一緒に行かない?

そう俺には聞こえた。

「へ?」

次は聖菜の顔をみて聞き誤らないように耳をすました。

「夏祭り、一緒に行かない??」

「俺と…誰??」

「私と大野君で!!」

あ…友達も誘っていいけど…」

すぐく顔が赤い…俺はそんな聖菜をかわいいと思った。

「いいけど…」

へ?という顔であいつが俺を見た。

こんどは自分の顔が赤くなるのを感じた。

「二人で行かない??」

「え…あ、本当??用事とか…無いの??」

「ねえよ。それに断るわけ無いじゃん。桜井の誘いに。

おれ、桜井が好きなんだよ。」

おれはこの日、この場面、この流れに全てをかけた。

シンとした空気が流れると、俺は何事も無かったかのように勉強を再開した。

本当は頭ン中真っ白で、心臓バクバクで、なに書いてんのか自分でも分かってなかった。

「す…好きって…どっちの??」

数分後、突然投げかけられた質問、俺はこのとき、自分がなんであるかと言ったのか今でも後悔している。

「英語で言つと I love you の方」

またシンとした空気が流れ、それから聖菜の笑い声が聞こえた。

「なんだよおつつつ」

「何今の！ーうちこんな告白初めてえ！！」

「うるせえ！！俺も今言い終わつた後歯が浮いたんだから！！」

「でしょおー！！でもね…今すぐうち嬉しい。」

そいつて聖菜は優しく微笑んでくれた。

「へ??？」

「大野君がうちの事そんな風に思つてくれてすごくすごく嬉しい
！！」

「それつて…さあ…」

「ん…？」

俺は今度はドジを踏まないように言葉を選んだ。

「桜井の返事に少しは期待していいってこと??？」

桜井の顔から笑顔が消える。

ああ…俺の青春終わった…

そう、思つた。

その気にさせるようなこと言つなよなつて、聖菜をすこし恨んだ。
だけど、次の瞬間俺の感情なんて一気に吹っ飛んだ。

「私も好きだよ。」

好きだよ…好きという発音がこんなに良いなんて、今まで思いもし
なかった。

思わず俺は、ここが図書館というのを忘れて聖菜に抱きついてた。

聖菜は少し顔を赤らめて笑っていた。

これが俺らの夏と恋の始まりだった。

その日の夕方、俺たちは二人で夏祭りに行つた。

長くて茶色い髪をひとつに束ね、ピンクの浴衣に身をまとつた聖菜
はいつも以上にきれいで清楚な感じがした。髪の毛が荒れててパツ
としない俺のそばにいるのはなんだかもつたいない気がした。

「行こう!!」

そう言われて初めてつないだ手は、今思い出してもドキドキするほど嬉しかった。

そして、付き合い始めて最初の夏は、中間テストの総合点1位桜井聖菜、2位大野明彦という張り出し表の展示とともに過ぎていった。

第三話 守

聖菜が始めて俺の家に来たのは、3回目のデートのときだった。

聖菜はいつも突然何かを思い出したように提案する。このときも、俺と聖菜は買い物に行こうといていた。でも、聖菜が突然立ち止まり、俺のほうを向いて言った。

「アキのお母さんに会いたい!!」

「ええ!？」

そうして、有無を言わず聖菜は俺を引っ張って家の前まできたんだ。

俺の家は図書館のすぐ隣のマンションだったし、夏祭りの夜もそこでずっと話していたから、聖菜は俺の家を知らないはずが無かった。家の前まで来た聖菜は俺のほうを向いて

「家、何号室??」

と聞いた。

「本当に俺んちに来るの!？」

「当たり前でしょお!?!ここまで来たんだからあゝ!!」

家にアキのお母さんいるんでしょ??」

「まあ…いないといったらうそになるけど…」

「アキお母さんに付き合ってること言ってるの??」

そんなの言ってるに決まってる。

こんな思春期真っ盛りな男の子が自分が付き合ってる人のことなんか親にいえるはずが無い。

「家でそういう系の話でないし…」

「へえ…」

そういつて、さっきのテンションはどこへやら、聖菜は顔をうつむかせた。

聖菜、ごめん。そう言おうとしたとき、聖菜の後ろに母が立っていた。

「お袋!？」

俺は驚きのあまり、半分叫んでいた。

お袋という単語に反応して聖菜がささず

「へ!？アキの!？」

といった。

お袋はそんなのおかまいなしに俺のところはずんずんと近づいてきて
「これアキ!！女の子泣かしちゃいかんだろおが!！」

と言つて、俺の頭に拳を思いツきしぶつけた。

「いつてえ!!」

そういつてもがく俺を無視し、今度は聖菜のほうを向いた。

「ごめんなあ。うちのアキが…」

「いや…何もされてませんから大丈夫です!!あのあ…」

俺は聖菜が言おうとしている言葉を察知し、すばやく

「お袋!俺、聖菜と付き合ってる。」

と言った。

きつと、俺が言わなきゃ、今度こそ男失格になってたと思う。

自分の母親に自分が付き合ってることを言えない男なんて、とんだ
チキンだと俺は感じたから…。

聖菜は真っ赤になった顔で俺を見てそして幸せそうな笑顔を作った。

「アキが!？付き合ってるのかい!？」

「まあね!!聖菜。桜井聖菜って言っただ!」

そう言つて、聖菜の肩を引き寄せた。

お袋はその姿を、目を大きくして口をあんぐり開けて見ていた。

「ああんたあ!!いつからよお!？」

「夏祭りン時から!!」

「夏祭り!？…そおかいあん時からかあ…」

「あのお…アキのお母さん。」

聖菜はお袋に近づき、まっすぐにお袋の目を見た。

「私、明彦君の最後の彼女になっていいですか?？」

急に言つたその言葉。たつた、一言のこの言葉に俺は最高の幸せを

感じた。

お袋はまたもやビックリした顔で聖菜と俺を交互に見た。

そして、やさしく微笑んで言った。

「こんな真つ直ぐな子にアキは愛されてんだね。立ち話は何だから、家に入らない??」

そういつてお袋は聖菜を家に招待した。

家に入つて、お袋はすぐにお茶とお菓子、そしてアルバムを出してきた。

「アキのお嫁さんになる人に、アキのちっちゃい頃のこと教えてあげようと思つてた。」

そういつて、食卓台に3冊のアルバムを乗つけて、一番大きいアルバムを開いてみした。

かわいい!!と聖菜が言い、ゲツと俺が言った。

「こんなもん見せんよ!!」

そういつて、俺はアルバム3冊をお袋からひつたくつた。

「アキ!!!!みしてよお!!」

「だめ!!」

そういつて、自分の部屋の本棚にアルバム3冊をしまつた。

その日の夜、俺んちは聖菜の話で盛り上がった。

そして、みんなが寝静まつた後、机に向かつて勉強してる俺にお袋が

「あの子を一生大切にするんだよ。」

人に愛されることは、すごく嬉しいことだけど、人を愛すのはもつと嬉しくて、大変なことなんだ。

あんたはあの子にたくさんの愛をあげなさい、そしてたくさんの愛をもらいなさい。」

そう言われたのを今でも鮮明に覚えている。

そのときは、すごく恥ずかしくて聞き流しているふりをしてたけど、今思つと、俺は良いお袋を持ったんだなつて感謝してる。

聖菜が見損なつた俺のアルバムを見たのは、高2の秋だった。

聖菜はあんなに長くてきれいだった髪の毛をばっさり切つて、すこし、すっきりした面持ちで俺んちにきた。

俺の部屋に入つて、いつものように部屋内のものをあさっていると急に悲鳴をあげた。

「あー！！これッ！！」

「何！？どうした？？」

そう言つて見てみると聖菜が3冊の本を大事そうに抱えていた。

「アルバム…」

「ああ…そっぴゃあ初めて聖菜がうちに来たとき俺がここに隠したんだよなあ…」

「見ても…いいかなあ」

そう言つて俺を見る。俺は聖菜のこの頼み方に弱くて、いつも「ダメ」といえない。

このときもそうだった。

「いいよ。別に」

そついつて、二人でアルバムを見ることにした。

「かわいい！！」

聖菜は赤ん坊のときの俺を知らない。俺もまた、聖菜の赤ん坊のときを知らない。聖菜は俺の過去を写真ひとつひとつを見て知ろうとしている…。

なんだかそれがすごく、くすぐったかった。

「聖菜。」

「ン？」

「今度、聖菜のアルバムも今度見せろよな。」

「…ごめん、ない。」

「へ？」

「うちんちね、うちが小6のとき家事で全焼しちゃつたの。だから残つてるのは小学校の卒業アルバムとか…だけだと思つ。」

「全焼…。」

「あッ、ごめん！めちゃくちゃ暗い話になっちゃったね！！でも大丈夫だよ！お金も全部お母さんが守ってくれたから！

それに家族誰一人怪我が無かったし！！」

「聖菜…」

おれはそう言っただけ聖菜を抱きしめた。

「あき…？」

聖菜は強い。何をやられても、どんなことがあっても弱音ははかなかった。

でも、なんだかそれが俺にとっては悔しいことでもあった。

「俺の前でくらい、弱音はいてくれよ。」

まだまだ、俺は聖菜を守ってないとこのとき感じた。

聖菜が俺を頼ってくれるまでは、本当に『守っている』ことにはならないと、そう感じたんだ。

「ありがとう」

聖菜がそう、俺の胸の中で囁いた。

この日からちょうど一年後、俺らは別れた。

俺が聖菜を「時間」という敵から守ってやれなかったから、俺らは引き離されたんだ。

もっと、聖菜を愛をあげていれば良かった。もっと、愛していると言えば良かった。

そう俺は、一年後に思うことになるのだ。

第四話 離

聖菜が髪を切ったあの日から、あいつは俺んちに来なくなった。バイトが忙しくなったとかどうとか。

聖菜のいない空間は俺に憂鬱と不安を与えるようになった。

電話やメールをしてもすぐに帰ってくるが、「忙しいから後でね。」で、すぐに切られてしまう。

そんな日々が続いたある日、俺が和也とゲーセンで遊んでいると、見覚えのある制服と顔の子を見た。

「聖菜だッ」

俺は思わず叫んだ。けど、聖菜には聞こえてなかったみたいだった。和也はため息をつくとき、俺の肩に手を置いて言った。

「ばあか幻覚だよ。聖菜ちゃんバイトで忙しいって言ってたんだろ??」

「でも、あれ…聖菜だよ。」

和也が聖菜の方を見たとき、肩に置いていた手の力が抜けるのを確かに感じた。

「まじだあ…なにやってんだ?こんなところで…」

そんなの俺も知らない。だから俺は和也のほうを向いて言った。
「後をつけよう。」

聖菜は数人の女の子の後ろを歩いていた。

制服が一緒だから多分同じ高校なのだろう。

そして、聖菜たちがついたところは、俺の通う高校の裏だった。

「何してんだ?あいつら…」

と和也が言うが、俺はそれを無視した。

嫌な予感がする…

そう思ったとき、俺の勘は見事に的中した。

ドンという鈍い音とともに聖菜は壁に叩きつけられた。

「かわいいからって調子のりすぎ。」

髪の長く、色の黒いオンナがそう言っ聖菜の髪を引張って立たせた。

「自分さあ…男子全員に好かれてるか思ってるの？超ナルシスト！！」

そういつて聖菜に手を上げた。

俺はそれが許せなくて、気づいたら取り巻きの女子も合わせて計九人を殴っていた。

そして、聖菜がしゃがんで泣いていた。

「アキ…あたし…」

そう言っ顔を覆っている聖菜の手には、無数の切り傷があつた。

「自分でやったの？これ。」

和也が聖菜の手を引張、聞いた。

すると、聖菜は首を立てに振った。

「あたし、アキがきれいだねって言ってくれた髪を毛切られて…次の日には殺されると思つたの…でも、あたしあんな奴らに殺されるなら、自殺したほうがマシだと思っ…それで…」

俺は、4年間付き合って初めて聖菜をたいた。

パシッという音と共に、聖菜の顔は和也のほうに向いた。

「死ぬなよバカ野郎ッ」

聖菜の目から次々に涙が流れる。

俺は聖菜を抱きしめて言つた。

「お前が死んだら困るんだよ。」

お前が死んだら、俺は誰を守ってればいいんだよ…バカ野郎頼れって言っただろ？お前が始めて家に来てお袋に挨拶したとき、一生守るっ俺は誓つたんだよッ

死ぬなんて…お願いだから言わないでくれ。

今も…これからも俺にはお前しかいないんだよ…」

「ごめん」と何回も泣きながら言っ聖菜につられて、俺もいつの間にか泣いていた。

「お前：俺の最後の彼女なんだろう？」

「うん…」

「ならよお…俺が死ぬまで生きてろよ…絶対に死ぬなよ…」

「うん…」

「何があっても俺に言えよ。じゃ無いとまた、今日みたいに勝手についてくからな」

「それストーカーだつて」

そつれまで俺の後ろに立ってた和也が言った。

俺たちは笑った。

それから、たくさんの月日が流れ、俺らは高校三年生になった。

「別れよう」そう言い出したのは最後の彼女になると、母の前で宣言した聖菜の方からだった。

信じられなかった。

いじめの事件以来、俺らは互いに本当に助け合える仲になったと思っていた。

聖菜も辛いときには俺に言ってくれるようになり、俺の前で泣いてくれた。

俺も、聖菜のために尽くしてきた。なのに…

「なんで？」

そう聞くと聖菜無理に笑顔を作って言った。

「あたしね、アキのおかげであたしは強くなれた。

アキのおかげであたしは今生きている。

アキのおかげであたしは毎日が楽しい…

まだあたしは、アキを愛してる。

でも、あたしはアキに会ってから、アキに頼りっぱなしになっていたの。

あたしの中心はいつもアキで、あたし、いつの間にかアキの前でしか素直になれてなかったの。

最初はいいかなあって思ってたけど、きつといけないんだよ。この

ままじゃ…

アキがいなくなっちゃったら、もう生きていけなくなっちゃうから。だから、あたしアキから離れなきゃ。

一人で生きてけるようにしなきゃって思ったの。

あたしには、妹もお母さんもお父さんもいて、でも本当の家族の前でも素直になれないあたしが、アキの前でしか素直になれてないあたしがいたの。

正直だめだと思った。

お父さん、今癌で入院中なの。お医者様はもう無理だっていったの。もう、2年も生きられないって。

最後にお父さんの前で元気で素直なあたし見せてあげないといけないって思うの。

だから、あたしはアキとは離れないといけないと思うの。じゃないと、アキ以外の人に素直なあたし見せてあげられないから…。

ごめんね、アキ…愛してるよ。」

目にいっぱい涙浮かべて笑う、俺が初めて見る聖菜がそこにいた。もう何を言っても無駄なんだと、俺は思った。

「それで…いんだな？聖菜は…」

俺の最後の悪あがきだった。けど、聖菜はいつものあのまっすぐな目で、俺を見て、

「うん」

と、力強く言った。

「じゃあ…強くなれよ。」

「うん」

その日、紫色の空の下で、俺らは最初で最後のキスをした。

数え切れないくらいの愛と思い出の詰まった、別れの悲しいキスだった。

途中、こらえてた涙が溢れてきて、俺らは泣きながら、唇を離れた。「じゃあ…今までありがとう」

そうだったのは俺で、手を振って別れた。

帰りのバスの中で俺は、頭を抱え込むようにして必死で声を押し殺して泣いた。

きつと、声は漏れてたと思う。

でも、泣きやめなかった。

本気の恋だったんだ。

なのに、なんで俺は引き止められなかったのだろう…

なんで俺は、お前が必要なんだと、声を張り上げて言えなかったんだらう。

時期にあいつは新しい恋をして、俺のことを忘れていくのだろうか…俺も、新しい恋をして、あいつを忘れられるのだろうか…

忘れるという言葉は、悲しい言葉だ。

誰かに忘れられるということは、その人はもう、俺と一緒にいた記憶がないということだ、

俺がその人の記憶からいなくなっているということなんだ。

…どうか、聖菜の記憶から、俺を消さないでください。

聖菜と俺がいたという事実を残しておいてください…。

そう俺は泣きながら神様に頼んだ。

第五話 越

聖菜が死んでもう4週間がたった。

俺は、今いる家を出て行き、一人暮らしをすることを決意した。
この家には聖菜との思い出が多すぎるからだ。

母さんは俺が一人暮らしすることに反対はしなかったし、逆に
「ようやく一人暮らししてくれんのかあ!!」
と喜んでいた。

準備をするときに最初に手にとったのが3冊のアルバムだった。
懐かしい

そう思つてパラパラと手紙をめくっていると、一枚の紙が落ちた。
何だろうと思い、その紙を拾つてめくつてみると、見慣れた懐かし
いマル字で、

『生まれて一番最初にとつてもらった写真を見る』
と書いてあった。

この文字は聖菜のものに間違いなかった。

俺は、書かれたとおりに一番最初にとつてもらった写真を出してみ
ると、また手紙が入っていた。

次は「おふくろの一番大好きな香水の空き箱。」

と書いてあり、物置の、お袋の宝箱の中を見てみた。

するとまた文字が書いてあり、

「あたしがあげたのに一度も使つてくれないコップの中」
と書いてある。

急いで台所に走って行き、聖菜からもらった、一回も使つたことの
無い犬のプリントが施されたコップのほどこ入った箱を開けた。
そして、中にある手紙を呼んだ。

「アキの部屋のカーペットのなか。」

そうかかっていた。

俺は急いで部屋に戻り、カーペットを部屋からはがし始めた。
すると今度は

「あたしとアキが始めて夏祭り行った時の待ち合わせ場所のブラン
コの前の二股の木の真下」
と書いてある。

俺の家から公園までは結構近い。

俺は、急いで聖菜と初めて行った夏祭りの待ち合わせ場所まで行った。

二股の木の周りを掘り始めた。

すると、ピンクの水玉模様の空き箱が出てきた。

それを開けると、中には無数の紙が入っていた。

どれも、日記のページを破ったものようだった。

見てみると、聖菜は毎日この手紙を書き続けていたらしい…

俺と別れてもずっとズーッと…

7月29日

今日、図書館で同じクラスの大野君に会った。

勉強をしに来ているみたい。

少し嬉しい気分だった。

だって大野君はあたしの憧れの人だもん

8月25日

今日、大野君に告白された！！

すごくすごく嬉しい

大野君があたしのこと好きだったなんて…

これ以上の喜び、今のあたしには無いなあ…

10月30日

今日はアキがアルバムをみしてくれた。

アキかわいかった！！

そこで、あたしは提案をしたのだ！

アキのアルバムに手紙を入れといたから大丈夫だよな。

もし、アキがこれに気づいたら、ちゃんと返事書いてね！！

1月4日

今日、アキに助けてもらった…

ありがとう

大好きだよ…

でもあたし、今日気づいたことがあるの…

もう、終わりがかね…あたしたち

1月4日

今日アキと別れた…

すんなりあきらめてくれてありがとう

でも…いつかあたしアキにプロポーズしに行くから待っててね！！

3月19日

アキーまだこれに気づかないの！？

どっただけですかぁ！？

あたし、決めました。

初めてアキのお母さんに言った言葉、あたし実現してみせるよ

アキはあたしの最初で最後の彼氏だから！！

アキもあたしが最後の彼女でありますように…

6月8日

今日留学が決まりました。

行くのは2週間後の月曜日です。

お願い、あたしが日本にいる間にこの手紙に気づいて…

聖菜の涙のシミは、俺と別れてから急激に多くなっていた。

そして、俺はその後にはかの日記とは違う、丁寧にびんせんに入った紙をみつけた。

それを開けてみると、俺宛の手紙だった。

日付は：聖菜が死んだ日の前日だった。

俺は急いでその手紙を読んだ。

第六話 君へ

『あきへ

とうとう気づけなかったねGAME OVERだ

この手紙を読んでいるころ、あたしはもうあきの近くにはいないだろうね…。

最後にあきの顔見たかったよ…
声聞きたかったよ…

多分あきはあたしと別れてからもあたしの事なんて考えてなかった
ただろおね

あきは結構いさぎいいモンね
そういうところも大好きだった。うつん大好きだよ…
実はあたし、あきに嘘言った。

お父さんは癌なんかじゃなかった。
お父さんあたしが小3の時、お母さんと別れて、今でも消息不明…
健康かどうか以前に、どこにいるかどうかすら分からないの。

あたしがあきと別れた理由はね、怖かったからなの。
もつと言うと、依存症になっててね、あたし。

あきがいないと死んじゃうかもってくらいあきのことずっと考えてたの。

そんな自分が怖くって怖くって…

だから、あたしいじめられてた時、これをきっかけにあきを嫌いになれるかもって思ってたの。
でも正反对だった…

あきが助けに来て、あたしをぶつた時、
一生あきから離れられないって、

あきがあたしの前で初めてないた時、
あきを嫌いになるのはもう無理だって思ったの。
でもね、

そう思えば思うほど辛かったの。

あきがいらない時間が、辛くって辛くってたまになかった。

あたし、だからそんな時間から逃げたかったの。

でも、生きてれば絶対にあきとはなれる時間が腐るほどでてくるでしょ？

だから、あたしはあきから逃げたの。

あたしがもつと強かったらさあ…ずっとあたし幸せでいれたのに…
あきとずっとにいる時間ほど楽しくて、幸せな時間は無かったよ。
けんかした時も、ずっと好きだった。
好きすぎてイライラしてたんだよきつと。

でも、幸せな時間に慣れちゃうことほどは最悪なことはいないんだね、
イライラしなくなつて、好きだけど、1日1回はさすがにあえなくなつたとき、

すごくすごく辛かった。

死んじゃうかと思った。

こんなわがままで身勝手なあたしを許してね。

あたしはあきが今好きな子ができたなら応援したいと思ってる…

でも、もしまだこんなあたしでも可能性があるのなら、どうかやり直してくれませんか??

連絡待っています。』

最後には、聖菜のアドレスと電話番号が書いてあった。

涙が止まらない…

本当に涙が止まらないというのは、息さえもできないくらい声が出る。

そして、その手紙をもったまま、俺は聖菜の家に足を運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710c/>

君へ

2010年10月28日04時49分発行